

【ストレングスを生かした支援①】

ストレンクス（強み）はいくつかの領域から成り立っています。まずは、「思いやりがある」「正直である」というような性格や行動特徴に関する領域、次に「記憶力が良い」「パソコンが使える」などの素質や能力に関する領域、そして最もその人らしい豊かな暮らしを支えることとなる「電車が好き」「ディズニーランドへ行きたい」などの興味、関心や希望、向上心の領域です。さらに「親身になって心配してくれる家族がいる」「歩いて買い物に行けるスーパーがある」などの環境の領域を加えることができます。

人は（障がいがあっても無くても）、このストレンクスによって人生を彩られ生きています。例えば、次の休みの日に「ディズニーランドに行く」ことが決まっていれば、それまでの待つ期間を楽しく、充実させるものにできるし、そのためにお金を稼がなくなっちゃとなれば、仕事への動機づけ（モチベーション）を高めることができる。また、少々の沈んだ気分もディズニーランドで楽しんでいる自分を想像することで、平常心へと回復させることができるでしょう。さらに、ディズニーランドでどう過ごすかを考え、相談したり、計画することは、主動感（受動感の反対です）を高め自立心を育むことができます。

一般的に考えても、多くの人たちが、ストレンクスに多くの時間を費やし、楽しく暮らすことを志向しています。また、そのすることで生きがいを感じ、無力感や絶望感に陥ることを防いでいるわけです。それとは逆にウィークネス（弱み）に注目し、克服しようとするばかりになれば、気分は沈み、モチベーションは当然のように低くなります。

ストレンクスモデルの支援方法は、本人中心の支援を組み立てることを必ず要請しますし、支援者も本人も楽しむという形の中で、知らず知らずに共に主動感を味わいながら、行動変容、あるいは成長を感じることができます。

ここでいう主動感とは、自分で感じ考え行動したことが、周りの人間関係を動

かし、環境が変わっていく様を主体的に感じる姿を指しますが、これこそが豊かな人生を保証するものなのです。

では、どのようにして話すことができない重い知的障がいがある方のストレンクスを発見していけばよいでしょうか？もちろん「どんなことが好きですか？」と尋ねても答えは返ってきません。しかし、少しの努力をするだけでたくさんの情報を手に入れることができます。

家族、特に母親に幼児期・学齢期でどんなことをして過ごしていたかを聞くことは、重要且つ確実な情報を手に入れることができる最も重要な手段です。次に有効な手段は事業所での過ごしを詳細に再観察することです。単なる「こだわり」とか「癖」とか「感覚刺激」とか「課題行動」とかにラベリングすることをしないで、観察するのです。

「他利用者の方のぬいぐるみやフィギュア、雑誌をいつも持って行ってしまう」、でもよく観察したら「仮面ライダーの関係のものが圧倒的に多い」とか、「いつもテレビを見ているか見ていないかわからないような態度」なのに、よくよく思い出しながら考えてみたら「日曜日の午前中、特に仮面ライダーはどこへも行かないでじっと見ていた」だったりするのです。そんなことがわかってきたとき、本屋へ買い物に行ったら「なんだかＴＶヒーローの絵本の前を何回も通り抜ける」なんていう観察が結びついたなら、「仮面ライダーが好き」は確実にストレンクスであるということは明白です。

このように話すことができない重度の知的障がいの方々であっても支援者の観察が適切且つ十分であれば、ストレンクスを発見することができます。

さて、では「仮面ライダーが好き」のストレンクス（興味・関心のストレンクスです）がわかったときに、どんな支援を組み立てていけばよいでしょうか？

今回は、「あきらめない」をキーワードにして、その組み立て方法について触れていきたいと思えます。